「居場所の社会学～生きづらさを越えて～」を読んで

当 HP でしばしば「居場所」について触れているだけに、「居場所の社会学～生きづらさを越えて～」のタイトルが目に着き購読した。

著者は「労働社会学」を専門分野というだけに、就職活動に追い立てられる大学生の不安や非正規労働者の不安、リタイヤ高齢者の不安等々に、社会学的視点から「生きづらさ」の根底にあり続ける「居場所」問題のノスタルジーではない実践知の指針を呈示しようとする書であった。

著者は、まず居場所に関として、「①誰かと一緒にいるからといって、居場所があるわけでない。　②ひとりでいることはステイグマ化（他者や社会集団によって個人に押し付けられた負の表象・烙印、負のレッテル）することがある。　③居場所の拡張は間違うことがある。　④過剰適応はよくない。」という四つの命題を呈示し、それらに関する事象・事柄を事例を紹介しながら解説した書であった。

著者は、居場所とは極めて主観的なもので、自分にとっての居場所が他人にとっての居場所であるとは限らないだけに、無理に過剰適応したり強引に押しつけたりせず、「積極的改善策」としての居場所づくりには「ぶつかり合い」による相互受容・変容が求められると説く。

一方、職場等の煩わしい人間関係に無理な適応を繰り返すと生きづらさを増すので、「消極的改善策」としてコミュニケーションからそっと離脱することも必要で、このためには職場等のマニュアル化が重要とも説く。

また、非正規労働者の居場所を考える時、まず生活費の安定が背景条件となるだけに、状況を改善する社会的・政治的意志（セフテイーネット構築）を持つことを説いているが、ここが著者の専門分野の「労働社会学」という視点からかも…。

労働社会学的知識は乏しい自分なのでちょっと難解な部分もあった。
お互いの背景が異なる者同士のコミュニケーションとは、すれ違い・勘違いが生じることが前提だからこそ更なるやりとりの繰り返し（螺旋的コミュニケーション）が必要と考える我流のコミュニケーション論からすれば、生きづらさを乗り越え居場所を求めるためには「積極的改善策」を支持したい。

阿部幸泰　　（2012 年 4 月 18 日　記）